

藍澤南城田園詩譯註稿

村山 敬三

まえがき

藍澤南城あいさわなんじょう（一七九二〜一八六〇）の漢詩については既に目崎徳衛著『南城三餘集私抄』（小澤書店・一九九四年）と内山知也著『藍澤南城 詩と人生』（東洋書院・一九九四年）とが刊行されている。前者は現代語譯があり、後者は書き下し文、語注、評があつて現代語譯はない。南城の詩には田園詩が多いが、二著の詩はもちろん田園詩に限られたものではない。南城には尊農思想があり、彼の私塾さんよどう三餘堂の入門者は半分以上が農民であつた。農村に暮らした南城にとって、田園詩は彼の詩を特徴づけるものである。以下に南城の詩文集である『南城山人三餘集』から田園詩と思われるもののいくつかを取り上げ、譯注を試みてみたい。既に内山氏が口語譯したものは取り上げない。

《凡例》

- 一、本譯注の底本は新潟縣立圖書館藏の『南城山人三餘集』（全十七卷。自筆稿本）である。
- 一、原本では返り點、送り假名が付されている。しかし、現代の訓み方に合わないものもあり、書き下し文は必ずしも原本とは一致していない。字體については、原本では舊字體と新字體が入り交じっているが、本稿では舊字

體に統一して示した。

一、内山知也著『藍澤南城 詩と人生』で既に譯されている作品を除いたため、連作の作品の場合、その一、その二などの順において抜けている作品がある。

○ 春雪（卷一） 春雪（春の雪）

東風一自度江隈 東風一たび江隈を度りしより、

十日春晴花欲催 十日の春晴花催さんと欲す。

天惜南枝香易漏 天、南枝の香漏れ易きを惜しみ、

故降微雪又封梅 故らに微雪を降して又梅を封ず。

（脚韻上平聲一〇灰、隈・催・梅）

【現代語譯】

東風が一たび川の隈をわたってから、

十日續いた春の晴天は、早く花が咲くようにとせきたてる。

天は南側の枝の香りが漏れやすいのを惜しみ、

ことさらこまかい雪を降らせてもう少し梅を咲かせないようにする。

○ 寒夜聞霜鐘（卷一） 寒夜霜鐘を聞く（寒い夜に霜夜の鐘を聞く）

鳴鐘何處寺 鳴鐘何れの處の寺ぞ、

彷彿夢邊聞 彷彿として夢邊に聞こゆ。

虎嘯寒山月 虎は嘯く、寒山の月、

龍吟遠水雲 龍は吟ず、遠水の雲。

度江聲更冷 江を度つて聲更に冷かに、

踰嶺響纒分 嶺を踰えて響纒ひびきわづかに分かる。

起見天猶夜 起きて見れば天猶ほ夜なり。

明皇爛作文 明皇爛として文もんを作す。

（脚韻上平聲二二文、聞・雲・分・文）

【語注】

。霜鐘…霜夜の鐘。冬の明け方の鐘の音。

。虎嘯…次の「龍吟」とともに、聞こえてくる鐘の音を喩えたもの。

【現代語譯】

鐘が鳴っているのはどこの寺であろうか、

夢を見ている枕邊にぼんやりと聞こえてくる。

虎は吠えている、もの寂しい山の月に。
龍は鳴いている、遠く離れた水の雲に。
川をわたって、鐘の音は更に冷ややかに、
峰を越えて、その響きは少しだけ分かれる。
起きて見ると空はまだ夜である。
明けの明星があざやかに綾を作っけきらめいている。

○ 雪景（卷三） 雪景（雪景色）

天下清高賞 天下、清高の賞、

越溪晴雪間 越溪、晴雪の間。

白松寒秀色 白松寒秀の色、

皜然羣玉山 皜然かうぜんたり、羣玉の山。

（脚韻上平聲一五刪、間・山）

【現代語譯】

天下において、氣高く氣品があると譽めたたえられる。
越後の谷間に、晴天に廣がる雪景色。

白くなった松は凍りつき、美しい色をしている、
山々はまるで玉ぎよくのように白くつやつやと輝いている。

○ 大雪歎 雜言（卷五）

大雪歎たいせつたん 雜言ざつじん（大雪の嘆き 雜言古詩）

紛紛雨綿絮

紛紛として綿絮めんじよを雨らし、

漠漠積鹽鹽

漠漠として鹽鹽えんごを積む。

鹽鹽將綿絮

鹽鹽と綿絮と、

皜皜盈四寓

皜皜として四寓みに盈てり。

比年大雪後耕耘

比年大雪耕耘おく後る。

山田蕪穢饑荐臻

山田蕪穢ぶわいし饑しきる荐いたに臻る。

願將綿絮作厚褥大被

願はくは綿絮もつを將て厚褥大被もつを作り、

遍覆普天寒民

遍あまねく普天の寒民を覆はん。

願將鹽鹽斗量車載

願はくは鹽鹽を將て斗量車載して、

遍施四海饑人

遍く四海の饑人に施さん。

綿也絮也似而非

綿や絮や似て非なり。

鹽也鹽也皆不眞

鹽や鹽や皆眞ならず。

玄天何故降斯物

玄天よ、何の故にか斯の物を降らす。

寒者轉寒貧轉貧

仰天空望黃綿襖

弊褌結凍竈無薪

俄聞窮閭嫠婦室

棟撓桷折身壓墳

又聞野行蓑笠客

一身寒凍死迷津

嗟斯物之於天壤

不唯無益害亦頻

或云是能殺蟄卵

使彼野蝗不敢產

或云是能養泉脈

使我田穉不敢旱

兩說糊塗何可取

偏恐表丈復表沴

唯有寒儒得小利

山窓夜照蠹殘簡

寒者は轉た寒く貧は轉た貧し。

天を仰ぎ空しく望む、黃綿襖。

弊褌凍を結びて竈に薪無し。

俄に聞く、窮閭嫠婦の室、

棟撓み桷折れて身壓墳すと。

又聞く、野行蓑笠の客、

一身寒凍して迷津に死すと。

嗟、斯の物の天壤に於ける、

唯だ益無きのみならず害も亦頻なり。

或いは云ふ、是れ能く蟄卵を殺し、

彼の野蝗をして敢て産ぜざらしむと。

或いは云ふ、是れ能く泉脈を養ひ、

我が田穉をして敢て旱せざらしむと。

兩說糊塗にして何ぞ取るべけんや。

偏に恐る、表丈復た沴を表はさんことを。

唯だ寒儒の小利を得る有り。

山窓夜照らす蠹殘簡。

○韻字 鹽・寓（慶韻遇韻、通押）、耘・臻・民・人・眞・貧・薪・填・津・頻（文韻眞韻、通押）、
卵・産・早・沝・簡（早韻濟韻銑韻、通押）

【語注】

○絮：古い綿。または粗製の綿。

○鹽：精製前の鹽。あらじお。

○黄綿襖：文字通りには黄色い綿入れの意だが、「黄綿襖子」くわうめんあうしは冬の太陽のこと。ここでは太陽が少しでも出てくれることを言う。

○或云是能殺蟄卵 使彼野蝗不敢産：菅茶山『黄葉夕陽村舍詩』前編卷二、「雜詩」三首のうちの一に「大雪は遺蝗を塵しにす」みなせろ（大雪塵遺蝗）とある。

○或云是能養泉脈 使我田穉不敢旱：『本朝文粹』卷一、紀納言「春雪の賦」に「農畝普く液ひ、泉脈遠く被ぶ」あまねうるほ（農畝普液 泉脈遠被）とある。

○表丈復表沝：「表」は長さ。一丈は十尺。積雪が一丈に及ぶこと。『文選』「雪賦」に「表丈なれば則ち沝を陰徳に表す。」（表丈則表沝於陰徳。）とある。『三餘集』頭注に示されている。

【現代語譯】

空ははらはらと綿を降らせ、

地上一面に鹽を積み重ねる。

その鹽と綿は、

まっ白に四方の家々の周りに満ちている。

毎年の大雪は春の農作業を遅らせる。

山間の田地は荒れて雑草が生い茂り、飢饉がやたらにくる。

できればこの綿で、厚くて大きな布團や寝間着を作り、

廣く世の貧しい人たちを覆ってあげたい。

できればこの鹽を、升で量って車に載せ、

廣く世の飢えている人たちに分け與えたい。

しかし、降ってきた綿は、綿に似ているが綿ではない。

積まれた鹽も本當の鹽ではない。

冬空よ、どうしてこのようなものを降らすのか。

凍えている者はますます凍え、貧しい者はますます貧しくなる。

人々は天を仰いで、冬の太陽が少しでも出てくれるのを空しく望む。

破れた綿入れは氷がついて冷たく、かまどには燃やすたきぎもないのだ。

ほどなく私はこんなことを聞いた、貧しい村の、夫を亡くした婦おんなの家が、

棟木むなぎが曲がり、垂木たるぎが折れて、婦おんなは體が押しつぶされてしまったと。

またこんなことも聞いた、蓑笠みのかさをつけた旅人が

野を行く途中に體中が凍え、道に迷って死んだということ。

ああ、雪はこの天地において、

ただ益がないというだけではなく、害が多いのだ。

ある人は、雪は冬ごもりの蟲の卵を殺し、

あの蝗いなせを生まれないようにしてくれると言う。

またある人は、雪は地中の水脈を作り、

田の稻を日照りの害から守ってくれると言う。

こういう説はでたらめで、とても認められない。

それよりも私はひたすら心配する、十尺もの大雪が降って災いの元になることを。

ただ貧しい學者には少しの利益を得ることがある。

山中の家の窓は、夜になっても蟲食いの書物を照らしてくれるのだ。

【補説】

「願はくは綿絮もつを將て厚褥大被を作り、遍あまねく普天の寒民を覆はん。」（願將綿絮作厚褥大被 遍覆普天寒民）の述べ方は、杜甫の「茅屋、秋風の破る所と爲るの歎き」（茅屋爲秋風所破歎）における、「安くんぞ廣廈の千萬間なるを得て、大いに天下の寒士を庇ひて俱に歡ばしき顔かほせん」（安得廣廈千萬間、大庇天下寒士俱歡顏）とよく似ている。南城は杜甫の詩句の影響をうけてこのように表現したのかもしれない。南城の書いたものの中には杜甫のこの詩を取り上げて「實錄」について述べた一文がある。その詳細については本誌前號所収の「藍澤南城における杜甫」（『大東文化大學 中國學論集』第33號・大東文化大學文學研究科中國學專攻院生研究會・二〇一五年）参照。

○ 插秧詞（卷五）

その一

插秧詞（田植えのうた）

愿朴山民不出郷

愿朴げんぼくの山民、郷きやうを出でず。

結繩餘俗未全亡

結繩けつじようの餘俗、未だ全くは亡ぼうぜず。

天桃春綻知播種

天桃てんたう、春綻ほころびて播種はしゆを知り、

芍薬夏薰期插秧

芍薬さふあう、夏薰さふあうじて插秧さふあうを期す。

（脚韻下平聲七陽、郷・亡・秧）

【現代語譯】

質朴な村民たちは里から外には出ない。

繩を結んで文字の代わりをしていた昔の風俗はすべてなくなったわけではない。

若桃の花が、春にほころび始めて種まきの時期を知り、

芍薬の花が、夏によい香りがすると田植えを始めようとする。

插秧詞 その二

工女下機皆在郊

工女はた機はたを下りて皆郊かうに在り。

秧歌聲裏笑嗷嗷

秧歌あうかの聲裏せいり、笑嗷嗷わらひがうがうたり。

羣頭白笠低頓地

羣頭の白笠低れて地に頓し、

一様紅裳臀益高

一様の紅裳、臀益高し。

(脚韻下平聲四豪、嗽・高)

【語注】

○工女：機織りの仕事をしている女。

○郊：田野。

○嗽嗽：大勢がやかましく騒ぐこと。

○白笠：目崎氏注では「すげがさ」。ここでは、「紅裳」との對比のために「白」を強調して述べたもの。

○紅裳：ここでは早乙女の着ている腰巻きのこと。

○臀益高：『漢書』卷六十五、東方朔傳に「朔之を笑ひて曰く、咄、口に毛無し、聲は警警たり、尻益高し

と。」(朔笑之曰、咄、口無毛、聲警警、尻益高。)とある。南城の注に「臀益高しは東方朔の語。」(臀益

高東方朔之語)と示されている。

○頓地：「頓」はぬかづく。頭を田に打ち付けるように動かしながら苗を植えてゆく。

【現代語譯】

女たちは機織りをやめて、みんな田んぼにいます。

田植え歌を歌いながら、ときどき大聲で笑っている。

たくさんの白い菅笠は、田んぼにたれてぬかづくように動き、

おそろいの紅い腰巻は、尻がますます高くなる。

插秧詞 その三

丁男在畔亂投秧 下男畔に在りて秧なぐを亂投す。

潑潑泥飛驚殺娘 潑潑泥飛びて娘を驚殺す。

不厭田深雙脚没 田深くして雙脚の没するを厭はざれど、

只憂點汚及紅裳 只憂ふ、點汚てんをの紅裳に及ばんことを。

(脚韻下平聲陽、秧・娘・裳)

【語注】

○丁男…一人前の男。

○潑潑…ここでは泥がはねることの擬態語。ぴちやぴちや。

○驚殺…ひどく驚かす。「殺」は副詞で、述語のあとに置かれ程度が深いことを表す。(『漢語大詞典』)

【現代語譯】

男たちは畦にいて、苗をめちゃくちゃに投げてよこす。

ぴちやぴちやと泥がはね、娘たちをキヤーキヤーと慌てさせる。

田が深くて兩足が沈むのはイヤではないが、

ただ泥の汚れが腰巻にまで付くことが心配だ。

○ 首夏晴望（卷五） 首夏晴望（初夏に晴天を見渡す）

北方風土異 北方風土異に、

四月是春晴 四月是れ春晴。

松碧溪間雪 松は碧なり、溪間の雪。

霞明野外櫻 霞は明かなり、野外の櫻。

貧村皆錦里 貧村、皆錦里、

陰嶺尙銀城 陰嶺、尙ほ銀城。

未知南國景 未だ南國の景を知らず。

今日孰輸贏 今日孰れか輸贏。

（脚韻下平聲八庚、晴・櫻・城・贏）

【語注】

霞…朝焼け、あるいは夕焼け。「かすみ」は日本語用法。

【現代語譯】

北方の風土は獨特で、

夏四月は春の晴天である。

松は緑をいつそう濃くする、谷間の雪で。

朝焼け夕焼けは明るく照らす、野外の櫻を。

貧しい村は、みな錦のような里であり、

日陰の峰は、まだ白い城壁のようである。

南國の景色は知らないが、

この景色と比べたらどちらが勝っているだろう。

○ 春日過農家（卷八） 春日農家に過ぎる（春の日に農家に立ち寄る）

夭桃枝上曬禪紅

夭桃えうたうの枝上、禪紅せんこうを曬さらす。

未免義山嘲殺風

未だ義山に殺風を嘲せらるるを免れず。

且向花前唯置鼎

且つ花前に向ひて唯だ鼎を置く。

主賓共是啜茶翁

主賓共に是れ啜茶翁せつちやおう。

（脚韻上平聲一東、紅・風・翁）

【語注】

禪…したばかま。ここでは腰卷。

鼎…ここでは茶釜のことか。

【現代語譯】

若い桃の木の枝に、紅い腰巻が干されている。
これでは李義山に殺風景だと笑われてしまう。
その上花の前に茶釜が置かれている。
家の主人も客の私も共に茶を啜るおじいさんだ。

【補説】

この詩には次のような南城の解説が付されている。

李義山云、殺風景謂清泉濯足。花上曬禪、背山起樓、煮鶴燒琴、對花啜茶、松下喝道。〈雜纂〉今既犯其二。
(李義山云ふ、殺風景は清泉に足を濯ふ。花上に禪を曬す、山を背にし樓を起こす、鶴を煮琴を焼く、花に對して茶を啜り、松下に道を喝すを謂ふ。〈雜纂〉今既に其の二を犯す。)

つまり、李義山が殺風景だとしている六つの事柄のうちの二つ、すなわち「花上曬禪」と「對花啜茶」を、南城はこの詩に詠み込んでしまっているというのである。だが、「其の二を犯す」と述べられてはいるものの、南城がこの詩を失敗作だと考えているとは思えない。逆にそれを故事として用いつつ、詩境としての味わいを獨自に持たせようとしていると考えられる。

○ 子規啼 (卷八) 子規啼 (しきてい) (ホトトギスの鳴き聲)

夏山經雨綠如驚

夏山雨を經て綠驚くがごとし。

夜夜子規啼故城

夜夜、子規故城に啼く。

回首不看來去影

首を回せど來去の影を看ず。

歸歸呼斷月邊聲

歸歸呼び斷ず、月邊の聲。

(脚韻平聲八庚、驚・城・聲)

【語注】

○ 故城：八石城。南城の三餘堂は八石山の麓にあつた。

○ 歸歸：子規の鳴き聲の擬音語。キヨツキヨツ。

【現代語譯】

雨が降つたあとの夏山は、綠が驚くほどだ。

毎晩ホトトギスが城址の山で啼いている。

頭をめぐらせてみるが飛んでいる影は見えない。

月が出ているあたり、その聲はキヨツキヨツと啼いてはとだえる。

○ 農家四時絶句十六首 (卷十一) 農家四時絶句 (農家の春夏秋冬)

春 その二

都門桃李節

都門桃李の節、

游者欲傾城

游者城を傾けんと欲す。

花深田舎巷

花は深し、でんしゃかう田舎巷、

只有織絺聲

只ち絺を織る聲のみ有り。

(脚韻平聲八庚、城・聲)

【語注】

。傾城：『漢語大詞典』に「全域、滿城」とある。「域全體をこぞる。一域全部」(大漢和辭典)。

【現代語譯】

都では桃や李の花が笑く時節、

町中の人たちはみんな遊びを楽しもうとしている。

たくさんのお花が笑っている田舎の路地の邊り、

縮みを織る音だけが聞こえている。

春 その三

負郭多桃李

負郭、桃李多し。

只祈秋實繁

只秋實の繁きを祈る。

野姑殊殺景

野姑殊に殺景、

花上曬紅禪

花上に紅禪こうこんを曬さらす。

(脚韻平聲十三元、繁・禪)

【語注】

。花上曬紅禪：南城の注に「花上禪を曬すは、李義山以て殺風景のひと爲す、田舎無心の俗、然りと爲す。」
(花上曬禪、李義山以爲殺風景之一、田舎無心之俗、爲然。)とある。花上に禪を曬すのを、李義山は殺風景のひととしてゐるが、田舎の無心の風俗はそれを當然のことだとしてゐると言う。「紅禪」はあかい腰巻(目崎氏)。

【現代語譯】

城下の田地には桃や李の花がたくさん咲いている。

家人の望みは實がたくさん付いてくれることだけだ。

農婦は特に殺風景なことに、

花の上に赤い腰巻をさらして乾かしている。

夏 その二

金鼓儺蝗夕

金鼓儺蝗だくわうの夕べ、

村村列炬光

村村列炬れつきよの光。

投蝨卑炎火

蝨ぼうを投じて炎火いざなに卑ふ。

周禮在吾郷

周禮しうれい吾が郷いに在り。

(脚韻下平聲七陽、光・郷)

【語注】

。蝨：ネキリムシ。稻の葉を食い散らす害蟲。

。南城はこの詩に注を付け、「每夏六月十四夜、鯖溪郷の俗に蝗を驅る。蓋し古禮なり。」(每夏六月十四夜、

鯖溪郷俗驅蝗、盖古禮也。)と言ふ。「鯖溪」とは、南條には鯖石川さばいしが流れていることに由來する呼稱である。

。周禮：周代の禮。

【現代語譯】

夜、金や鼓を打ち鳴らし蝗いなごを追い拂う。

村中で、列を作ったたいまつたいまつの光が續いている。

ネキリムシを投げて炎におびき寄せる。

中國周代の禮法は私の村里にも残っている。

熱耘方苦渴

熱耘方に渴に苦しむ。

田畔暫休時

田畔暫く休する時、

山下泉堪掬

山下、泉掬するに堪へたり。

冷令人手龜

冷、人手をして龜せしむ。

(脚韻上平聲四支、時・龜)

【語注】

。人手龜：頭注に「不龜手の藥、〈莊子〉音義に、音は均なりと、非なり。今字のごとく讀む。」(不龜手の藥、
〈莊子〉音義、音均、非也。今如字讀。)とある。「莊子」は逍遙遊篇に「宋人に善く手に龜せざるの藥を爲
る者有り。」(宋人有善爲不龜手之藥者。)とある。

【現代語譯】

暑い中での草刈りでひどく喉が乾く。

田の畔でしばらく休んでいる時、

山の下で、泉をすくうことができた。

その冷たさは手があかぎれになるほどだ。

夏 その四

早稻初含穗

早稻、初めて穂を含む、

鳴蜩嘒夕陽

鳴蜩、夕陽に嘒たり。

不同午蟬聒

午蟬の聒しきに同じからず。

耘者耳先涼

耘る者耳先づ涼し。

(脚韻下平聲七陽、陽・涼)

【語注】

。鳴蜩：『詩經』豳風「七月」に「五月、鳴蜩」(五月鳴蜩)とある。南城の注に「俗説に、鳴蜩早穂の出づるを報ず」(俗説、鳴蜩報早穂出)とある。

【現代語譯】

早稻がやつと穂を含んだばかり、

ひぐらしが夕陽の中で小さく鳴いている。

晝時の蟬がやかましいのは違う。

草刈りの者は耳がまず涼しくなる。

秋 その一

水冷鯨魚美

水冷やかにして鯨魚美なり。

露蒸松菌香

露蒸して松菌香し。

早粳初作飯 早粳初めて飯と作す。

時物可同嘗 時物、同に嘗むべし。

(脚韻下平聲七陽、香・嘗)

【語注】

。儵魚…はや。淡水魚。『莊子』秋水篇に「儵魚出で遊ぶこと従容たり。是れ魚の楽しみなり。」(儵魚出游従容。是魚樂也。)とある。

。松菌…松の根に生ずるキノコ、松茸のこと。三餘堂の裏山では松茸がよく採れたという。

【現代語譯】

水は冷たく、ハヤは美しく泳いでいる。

露を蒸すと、松茸はよい香りがしてくる。

早く實ったうるち米を初めて飯にしてみた。

時節の物もいっしょに味わってみよう。

秋 その三

城市多名菊 城市、名菊多し。

移栽錦一籬 移し栽ゑんとす、錦一籬。

隣翁來諫止 隣翁來りて諫止す。

陋巷不相宜 陋巷には相宜しからずと。

(脚韻上平聲四支、籬・宜)

【語注】

。不相宜…この場合の「相」は互いではなく、「く」に」と動作が一方にむかうことを表す。

【現代語譯】

町には美しい菊が多い。

色鮮やかになっている籬まがきに移して植えようとする。

隣のおじいさんがやって来て止めたほうがいいと言う。

狭い路地にはふさわしくないと。

秋 その四

并收蔬與穀 并收す、蔬と穀と、

旨畜不他求 旨畜他に求めず。

雖歲非豐穰 歳とし、豐穰に非ずと雖も、

田家樂在秋 田家たのしみの樂は秋に在り。

(脚韻下平聲一一九、求・秋)

【語注】

○歳…穀物の實り。

【現代語譯】

野菜と穀物を一緒に收める。

冬場に備えて貯藏するのはこれだけでよい。

作柄は豊穰とは言えないが、

農家の楽しみは秋にある。

冬 その一

小男初負米

小男初めて米を負ふ。

御廩雪途橋

御廩ぎよりん、雪途せつとの橋かみじき。

老母俟門立

老母門に俟ちて立つ。

不知鑄飯焦

知らず、鑄飯さうはんの焦ぐるを。

(脚韻下平聲二篇、橋・焦)

【語注】

。御廩…役所の藏。南城の注に「官倉、本縣に在り。民稱して御廩と爲す。」(官倉在本縣。民稱爲御廩。)とある。「本縣」とは柏崎縣。目崎氏は鯖石郷とする。

。櫛…かんじき。深い雪途を歩くときの道具。足が雪に埋まらないようにする。

【現代語譯】

まだ小さいせがれが初めて米を背負った。

役所のお倉までかんじきをつけて雪道を歩くのだ。

老母は歸りを待つてずっと玄關に立っている。

釜の飯が焦げているのも氣づかずに。

冬 その三

雪深門絶跡

雪深くして門跡あとを絶す。

未見紙商來

未だ紙商の來たるを見ず。

學童資給盡

學童資給盡つく。

木筆畫爐灰

木筆もて爐灰かに畫く。

(脚韻上平聲一〇灰、來・灰)

【語注】

。未見紙商來…南城の注に「山民寒中に紙を製し、歲末に來り賣る。」（山民寒中製紙、歲末來賣。）とある。

【現代語譯】

雪が深く降り積もり、我が家の門は出入の跡も消えている。

紙賣りの商人もやって來ない。

學童に渡す紙もはやなくなった。

塾生は木を筆にしているりの灰に字を書いている。

冬 その四

蒿砧寒曉急

蒿砧かうちん、寒曉かんげうに急なり。

織席歲除前

席を織る、歲除の前。

非求商販利

商販の利を求むるに非ず。

聊欲作春筵

聊か春筵と作さんと欲す。

（脚韻上平聲一先、前・筵）

【現代語譯】

砧で藁わらを打つ音が、寒々とした夜明け方せわしく聞こえてきます。

大晦日の前にむしろを織っているのです。

商賣をして儲けようというではありません。

なんとか新年に使うむしろにしようというのです。

○ 凶年歎（卷十三） 凶年歎（凶年の嘆き）

一曝滌場供上租

一曝、場じやうを滌はらひて上租に供す。

曾無遺滯利鰥孤

曾て遺滯の鰥孤くわんこを利する無し。

食盡寒糝醜噉蹴

食盡きて寒糝かんり、噉こしう蹴はを醜はじ、

求糧來販引光奴

糧を求めて來り引光奴いんくわうどを販す。

（脚韻上平聲七虞、租・孤・奴）

【語注】

○ 滌場：作業場を洗う。『詩經』幽風、七月の詩に「十月場を滌はらふ」（十月滌場）とある。

○ 遺滯：遺秉と滯穗であると南城は注をつけている。「取り忘れた稻束や落穂」（目崎氏）。

○ 噉蹴：頭注に「噉爾蹴爾の食、孟子に見ゆ。」（噉爾蹴爾之食見孟子）とある。『孟子』告子上の「噉こし蹴ことして之を與ふ。」（噉爾而與之。）「蹴しめ爾うじとして之を與ふ。」（蹴爾而與之。）に基づく。したがって、「噉蹴の

「食」は人に見下されながら食の施しを受けることを言う。目崎氏は「泣き叫び、じだんだ踏むこと」と注し、「醜」を「醜みにくうし」と訓む。

。引光奴：付け木。「松の薄片に硫黄を塗ったもの」（目崎氏）。南城の注に「引光奴は發燭なり。又焠さいじ兒と名づく。天録識餘及び輟耕錄に見ゆ。郷俗糧無き者は、之を賣りて以て蔬糲それいに代ふ。」（引光奴發燭也。又名焠兒。見天録識餘及輟耕錄郷俗無糧者。賣之以代蔬糲。）とある。「蔬糲」は野菜や玄米。

【現代語譯】

稻を乾燥し終わって作業場を洗いきよめ、年貢を納める。

以前には落ち穂さえもなく、それを拾う男やもめと孤兒の助けにもならなかった。

貧しい女やもめは食糧が盡き果てたが、施しを受けるのを恥じ、

糧を得るため付け木を賣って歩く。